



Title	21世紀の大学とコミュニケーションデザイン：社会における、社会のための大学
Author(s)	有本, 建男
Citation	Communication-Design. 2010, 3, p. 206-207
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9009
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

21世紀の大学とコミュニケーションデザイン ——社会における、社会のための大学

科学技術振興機構・社会技術研究開発センター長

有本 建男

東西冷戦が終わりインターネットが世界中に普及して20年。国際政治と情報技術の革新はグローバリゼーションを加速し、世界の社会経済システムに大きな転換が起こった。国、組織、学問分野の境界が低くなる一方で、今回の経済危機によって、われわれは、世界が決して一様なフラットではなく、多様性、地域性、歴史性への配慮が大切であることを認識することができた。“Shaping the Post-Crisis World”。危機の後に来る世界と価値感の形成について、期待と不安の中で、世界中で真剣な議論が始まっている。こうした大きな変化にどう立ち向かうのか。今こそ大学を中心として各セクター間のコミュニケーションとそのデザイン力が問われていると思う。

昨年は、国連教育科学文化機関（UNESCO）と国際科学会議（ICSU）の主催で、「世界科学会議」が、ハンガリーの首都ブダペストで開催されてから10年の節目であった。この会議で、「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言」いわゆるブダペスト宣言が発表された。すなわち、21世紀の科学の責務として、20世紀型の「知識

のための科学 : science for knowledge」にくわえて、「平和のための科学 : science for peace」、「持続的発展のための科学 : science for development」、「社会における、社会のための科学 : science in society, science for society」が高らかに宣言されたのであった。

この趣旨は、近年政策レベルから大学経営や研究現場まで次第に浸透し、わが国では第2期科学技術基本計画（2001年）に盛り込まれた。イノベーション、科学コミュニケーション、科学リテラシーなど、科学と社会の関係強化が大きな政策課題になっているのも、この一環と理解できる。筆者が勤める科学技術振興機構・社会技術研究開発センターは、この趣旨を具体化するファンディング機関として設置されたものである。

ブダペスト宣言の「科学」を「大学」に置き換えてみよう。「university for knowledge」にくわえて、「university in society, university for society」。今年2010年は、近代大学のモデルといわれるベルリン大学が創設されて200年。ブダペスト宣言は、19世紀初めに始まり20世紀後

半に完成した近代科学と近代大学の制度や体制、評価の方法、科学者の規範に大きな見直しを迫っているといえる。経済と地球温暖化の2つの人類的な危機に対して、大学と科学はどう応えるのか。危機は機会でもある。21世紀における大学と科学者の社会的責任が問われるとともに、期待も大きい。

新世紀の大学と科学者は、その行動規範といわれてきた「論文発表か、さもなくば死か」、そして価値中立、研究自由の原則にだけ囚われていたのでは、M.ウェーバーが100年前に指摘したように、資本主義発展の最後に現れる「精神のない専門人」「心情のない享楽人」「末人」に墮するかもしれない。そうなれば、社会からの信頼と支持は消え失せてしまうだろう。

この大転換の時代、将来世代と自然のために、社会と大学と科学の内外を架橋するコミュニケーションデザインの理論研究と実践は必須になっていると考える。